

「名」にちなむ詩歌

—『文華秀麗集』「燕」詩群の背景—

山本登朗

一、『文華秀麗集』の「燕」詩群

嵯峨天皇の勅命によって弘仁九年（八一八）に編集された勅撰漢詩集『文華秀麗集』下巻の「雜詠」部に、「燕」を詠んだ五首の詩が連続した形で収録されている。その最初の一首は、巨勢識人（巨識人）の、現在は残っていない四首の連作「春日四詠」に和して詠まれた嵯峨天皇の作である。『文華秀麗集』には、「春日四詠」に和して詠まれたであろう嵯峨天皇の四首のうち、「舞蝶」（110）「飛燕」（111）の二首だけが次のように並んで収録されており、「燕」を題とする五首の詩群は、その第二首（111）から始まっている。（『文華秀麗集』の本文と訓読は、小島憲之氏校注『日本古典文学大系、懐風藻・文華秀麗集・本朝文粹』（昭和四四年・岩波書店）により、一部を改めた。）

和巨識人春日四詠。二首。

舞蝶（110）

数群胡蝶飛乱空、雑色紛々花樹中。

本自不因弦管響、無心処処舞春風。

飛燕（111）

望裡遙聞燕語声、双飛来往羽儀輕。

本期借屋初乳子、還恥空為漢后名。

巨識人の「春日四詠」に和す。二首。

御製

舞蝶（110）

数群の胡蝶空に飛び乱り、雑色紛々たり花樹の中。

もとより弦管の響きによらず、無心に処処春風に舞う。

飛燕（111）

望裡遙かに聞く燕語の声、双飛来往して羽儀輕し。

もとより期す屋を借りて初めて子を乳てんと、還りて
恥づ空しく漢後の名を為すことを。

これに続いて、同じ巨勢識人の「春日四詠」に和した朝野鹿
取と滋野貞主の、おそらくはこちらも本来は四首ずつ詠まれた
であろう作の中から、「飛燕」を題とする詩だけが次のように並
べられている。

和巨内記春日四詠。一首。朝鹿取

飛燕 (112)

衣玄裳素入蘭闥、双去双来不独栖。

梁上登巢居是逸、簾前向戸飛暫低。

巨内記の「春日四詠」に和す。一首。朝野鹿取

飛燕 (112)

衣玄く裳素く蘭闥に入り、双び去り双び来たりて独り

は栖まず。

梁上巢に登りて居ることは是れ逸なれど、簾前戸に向か

ひて飛びこと暫く低し。

和巨内記春日四詠。一首。滋貞主

飛燕 (113)

故年剪爪今春帰、棟宇改修猜未依。

稟性将凡鳥□□、再三飞到狎簾帷。(□□は諸本欠字。)

巨内記の「春日四詠」に和す。一首。滋野貞主

飛燕 (113)

故年爪を剪り今春帰れど、棟宇改修すれば猜みて未だ
依らず。

稟性凡鳥と□□、再三飛び到りて簾帷に狎る。

さらに続いて、嵯峨天皇の「観新燕(新燕を観る)」という、
現在に残っていない詩に「奉和」した佐伯長継、小野年永の作
が次のように並べられて、「燕」の詩群は終わっている。

奉和観新燕。一首 (114)。

佐長継

海燕新来度春天、差池羽翼如往年。

既能忘却蒼波遠、朝夕欲巢画梁辺。

「新燕を観る」に和し奉る。一首 (114)。佐伯長継

海燕新たに來たりて春天を度り、差池たる羽翼往年の

如し。

既に能く蒼波の遠きことを忘却し、朝夕巢くはむとす

画梁の辺。

奉和観新燕。一首 (115)。

野年永

早燕双飛入曙晴、遙経聖眼奏新声。

還嗟未狎鴛鴦帳、先負漢家妖艶名。

「新燕を観る」に和し奉る。一首 (115)。小野年永

早燕及び飛びて曙晴に入り、遙かに聖眼を経て新声を奏す。

還りて嗟く未だ鴛鴦の帳に狎れざるに、先づ漢家妖艶の名を負ふことを。

燕は、雌雄一対で飛び、人家を恐れず近づいて梁の上などに巢を作る習性を持つが、中国の詩では、古くから、宮廷の奥深く「簾」のあたりまで近づき、時に后妃や女官たちの部屋にまで入り込もうとする姿が、多く詠まれている。その一例として、主人に棄てられた夫婦の心を一対の燕に託して詠んだとされる南朝宋の鮑照の作「詠双燕」(『玉台新詠』卷四)と、初めて飛来したばかりの燕を詠んだ梁の簡文帝の作「新燕」(同・卷十)を次に掲げておく。

詠双燕

鮑照

双燕戲雲崖、羽翮始差池。

出入南閨裏、經過北堂陲。

意欲巢君幕、層楹不可窺。

沈吟芳歲晚、徘徊韶景移。

悲歌辭旧愛、銜泥覓新知。

双燕を詠ず

双燕雲崖に戯れ、羽翮始めて差池す。

南閨の裏に出入し、北堂の陲を経過す。

意に君が幕に巢くはんと欲するも、層楹窺ふべからず。沈吟して芳歲晚れ、徘徊して韶景移る。

悲歌して旧愛を辞し、泥を銜んで新知を覓む。

新燕

梁簡文帝

新禽応節婦、俱向吹樓飛。

入簾驚鉤響、來窓碍舞衣。

新燕

梁簡文帝

新禽節に應じて帰り、俱に吹樓に向かつて飛ぶ。

簾に入らんとすれば鉤響に驚き、窓に來たれば舞衣に碍げらる。

『文華秀麗集』の「燕」を詠んだ五首の詩の趣向や表現も、多くは中国詩の表現をそのままに学び取っており、独自の要素は必ずしも多くはない。しかし、そのような中であって、最初の嗟峨天皇「飛燕」(111)と最後の小野年永「奉和觀新燕」(『新燕を觀る』に和し奉る)(115)のそれぞれの末句に、漢の成帝の后であった女性「趙飛燕」の名が詠み込まれていることが注意される。趙飛燕は、「怨歌行」(『文選』卷二十七他)の作で名高い班婕妤に代わって成帝の寵を受けた女性として知られるが、『漢書』(卷九十七下、外戚列伝六十七下)によれば、もと「官

婢」であつて歌舞を学び、顔師古の注によればその「体」が「輕」かつたために「飛燕」と号した。いま問題にしている『文華秀麗集』の二首の詩にはその「飛燕」という名そのものは示されていないが、嵯峨天皇「飛燕（Ⅲ）の末句には「還恥空為漢后名（還りて恥づ空しく漢後の名を為すことを）」、小野年永「奉和觀新燕（『新燕を觀る』に和し奉る）」（115）には「還嗟：先負漢家妖艷名（還りて嗟く：先づ漢家妖艷の名を負ふことを）」とあつて、詩題の「飛燕」や「燕」から、そこに漢の成帝の后「趙飛燕」の名が暗示されていることが容易に理解される。前者の詩では、雌雄一対で飛来しておそらくは宮廷の殿舎で子育てをしようと「期」している「飛燕」が、皇帝の寵愛を受けて后となつた趙飛燕と同じ「名」を持ちながら、そのような実体を伴わないただの「飛燕」であることを恥ずかしく思っているその思いが、「飛燕」自身の立場から述べられている。後者の詩では、「新燕」すなわち初めて飛来したばかりの不馴れな燕が、後宮の部屋の「帳」に親しく近づくこともまだできていないのに、自分が「飛燕」という、「妖艷」で名高い漢の后と同じ名前だけを、実体もなく空しく持つていることを嘆いている。

趙飛燕は古く後漢の張衡「西京賦」（『文選』卷二）に「衛后興於鬢髮、飛燕寵於體輕（衛后は鬢髮より興り、飛燕は体の輕

きにより寵せらるる）」と見え、初唐の沈佺期「鳳簫曲」に「飛燕侍寢昭陽殿、班姬飲恨長信宮（飛燕、寢に侍す昭陽殿、班姬恨みを飲む長信宮）」とあるように、帝の寵愛を受けた後の例として、詩にも多くその名が詠まれている。しかし、「燕」という鳥を題にして詠まれた中国の詩の中に、この「趙飛燕」という歴史上の人名を、いわば掛詞（相關語）的に詠み込んだ例を、いま見出すことができない。この表現は、あるいは『文華秀麗集』に、つまりは嵯峨朝の漢詩に特有の表現だったのでないかと推測されるが、そうだとすれば、その背景には、どのような事情が考えられるだろうか。

二、『万葉集』の「言」と「名」

『万葉集』には、次のように、「言ことにしありけり」という定型句を用いて詠み出された歌が五首見出される。（以下、万葉集の訓読は、小島憲之・木下正俊・東野治之各氏校注「新編日本古典文学全集」（平成六～八年・小学館）による。）

《卷四・七二七・大伴家持》

萱草吾下紐尔著有跡鬼乃志古草事二思安利家理

（忘れ草我が下紐に付けたれど醜しの醜草言ことにしありけり）

《卷七・一一三二》

夢之和太事西在来寤毛見而来物乎念四念者

(夢のわだ言にしありけり、現にも見てけるものを思ひし思

へば)

《同・一一四九》

住吉尔往云道尔昨日見之恋忘貝事尔四有家里

(住吉に行くといふ道に昨日見し恋忘れ貝言にしありけり)

《同・一一九七》

手取之柄之忘跡磯人之日師恋忘貝言二師有来

(手に取るがからに忘ると海人の言ひし恋忘れ貝言にしあり

けり)

《同・一二二二》

名草山事西在来吾恋千重一重名草目名国

(名草山言にしありけり、我が恋ふる千重の一重も慰めなく

に)

また、同集の卷六には次のような長歌が見える。ここには「言

にしありけり」という定型句は用いられていないが、その後半

の内容は、右の五首、中でも一二二三番歌とまったく同じであ

る。

《卷六・九六三・大伴坂上郎女》

大汝 小彦名能 神社者 名著始鷄目 名耳乎 名児山跡

負而 吾恋之 千重之一重 裳 奈具佐米七国

(大汝 少彦名の 神こそば 名付けそめけめ 名のみを

名児山と負ひて 我が恋の 千重の一重も 慰めなく)

同種の表現は、これ以外にも、万葉集中に次のように見るこ

とができる。

《卷七・一〇九七》

我勢乎乎乞許世登人者雖云君毛不来益山之名尔有之

(我が背子をこち巨勢山と人は言へど君も来まさず山の名に

あらし)

《卷十五・二七一八・(遣新羅使の歌)》

伊敵之麻波奈尔許曾安里家礼宇奈波良乎安我古悲伎都流伊

毛母安良奈久尔

(家鳥は名にこそありけれ海原を我が恋ひ来つる妹もあらな

くに)

これらの歌では、植物の名、地名、貝の名といったさまざま

な「名」が、名前だけでその実体を伴っていないものとして非

難されている。一一三三番歌を除けば、他の五例ではすべて、

そのような「名」を持ったものや場所が、「名」にふさわしい実

体を持っていないものだったとして非難されているが、作者はその非難を通して、それらの「名」にすぎろうとした自分自身の恋や憂いの耐えがたさを嘆いているのである。

右の八首のうち一一三二番歌だけは、以前から見たいと願っていた吉野川の「夢のわだ」を実際に見ることができたのであり、作者はそのことを喜んでいて、けっして嘆いてはいない。しかしながら、ここで作者は、現実に見ることなど不可能だと絶望していたこれまでの自分が、「夢のわだ」の「夢」という「名」に惑わされていたことを過去にさかのぼって確認し、「夢のわだ」という地名が実体を伴っていなかったことを、喜びつつ非難している。用いられ方に違いはあるが、「名」が実体を伴っていないことに気付き、それを信じていた自分を嘆いてみせるといふ点においては、この一一三二番歌も、他の七首と変わらないのである。

『万葉集』だけでなく、平安時代十世紀に書かれたと考えられる『大和物語』（第一四七段）でも、二人の男に求婚され一人を選ぶことができず困惑して入水した主人公の女が、死の直前に次のような辞世の歌を詠んでいる。

すみわびぬわが身投げてむ津の国の生田の川は名のみなり
けり

「生く」という「名」を持った生田川で逆に死ななければならぬという、苦悩に追い詰められた自分の運命に対する嘆きを、女は、さきの『万葉集』の歌と同じように、生田川の「名」が実体を伴っていなかったことへの非難という形で表現しているのである。

三、「名」への注目

以上に見た歌で実体を伴っていないとして非難されていた「名」の多くは、「夢のわだ」「名草山」「名児山」「巨勢山」「家島」といった地名であった。よく知られているように、『播磨国風土記』や『出雲国風土記』では、たとえば次のように、きわめて数多くの地名の起原が語られている。（風土記の訓読は、植垣節也氏校注『新編日本古典文学全集・風土記』（平成九年・小学館）により、書き下し文のみを示す。）

『播磨国風土記』飾磨郡

阿比野といふ所以は、品太の天皇、山の方ゆ幸行しし時に、從臣等、海の方ゆ参り会ひき。故れ、会野と号く。

『出雲国風土記』意宇郡

安来の郷、…神須佐乃哀の命、天の壁立ち廻り坐しき。そ

の時、此処に來坐して詔りたまひしく、「吾が御心は安平けく成りぬ」と詔りたまひき。故れ、安來と云ふ。

當時の人々の「名」に対する意識が、とりわけ地名に集中していたことが、これらのおびただしい地名起原譚によつてうかがわれるが、同様の事情は、また以下のような『万葉集』の歌からもうかがうことができる。

卷五には、「領巾振嶺」という山の名の起原を詠んだ山上憶良の歌（八七二）と題詞が、次のように見える。（題詞は書き下し文のみを示す。）

大伴佐提比古郎子、特り朝命を被り、使ひを藩国に奉はる。……妾松浦い、この別れの易きことを嗟き、その会ひの難きことを嘆く。即ち高き山の嶺に登り、……遂に領巾を脱きて塵るに、傍の者涕を流さずといふことなし。因りてこの山を号けて、領巾振嶺といふ。乃ち歌を作りて曰く、

得保都必等麻通良佐用比米都麻胡非尔比例布利之用利於返
流夜麻能奈

（遠つ人松浦佐用姫夫恋に領巾振りしより負へる山の名）

ここでも、『風土記』と同じように、「領巾振嶺」という地名（山の名）の起原が、説話の形で語られ、歌に詠まれている。こ

れらの例では、地名という固有名詞がその成立時に持っていたとされる普通名詞的な意味が、その地名の起原（語源）として呈示されていると言つてよい。これに対して、次のような場合は逆に、既製の地名から、掛詞的な発想を通して、さまざまな普通名詞の意味が読み取られていると考えられる。

《卷七・一一九三》

勢能山尔直向妹之山事聴屋毛打橋渡

（背の山に直に向かへる妹の山事許せやも打橋渡す）

ここでは、吉野川（紀の川）を隔てて向かい合っている背の山と妹の山が、その名前によつて擬人化され、恋人同士の男女であるかのように詠まれている。

《卷十・一八二二》

吾瀬子乎莫越山能喚子鳥君喚變瀬夜之不深刀尔

（我が背子を莫越の山の呼子鳥君呼び返せ夜の更けぬとに）
この歌では、莫越の山という地名が、掛詞的に、超えさせないでほしいという意味の「な越し」に解釈され、一首全体の意味に大きく関わっている。

《卷七・一二二九・柿本人麻呂歌集》

児等手乎卷向山者常在常過往人尔往卷目八方

（児らが手を卷向山は常にあれど過ぎにし人に行き卷かめや

も)

ここでは、卷向山の地名から「巻く」すなわち手枕をするという意味が引き出され、死んでしまった近親者に会えない寂しさが嘆かれている。

《卷十・一八一八・柿本人麻呂歌集》

子等名尔関之宜朝妻之片山木之尔霞多奈引

(兄らが名にかけの宜しき朝妻の片山崖に霞たなびく)

ここでは、地名「朝妻」が、「あの娘の名に結びつきたい」名前とされ、それによって、その娘への恋情が表現されている。この莫越の山や卷向山、そして朝妻には、「な越し」や「巻く」「妻」という意味にふさわしい実体は、言うまでもないことだがそもそも備わっていない。もとよりそれを承知のうえでこれらの歌は詠まれているのだが、その実体のなさをことさらに疑い、非難すれば、それはそのまま、前章で見た「言にしありけり」などの表現に連続することになる。地名という「名」に注目し、そこに掛詞的解釈を通してさまざまな意味を読み取ろうとしたり、逆にそれらさまざまな意味にふさわしい実体がないことを指摘して非難したり嘆いたりする方法は、日本の説話や和歌が、さまざまな形で展開してきたものだったのである。

その後、平安和歌の世界では、この種の表現の延長上に、「名

にし負はば」という定型句を用いた歌が、次のように数多く詠み出されてゆくことになるが、ここではその事実だけを確認して、詳細な検討は別の機会に譲ることにしたい。

《古今集》 羈旅・四一・在原業平、《伊勢物語》 第九段 名にし負はばいざこととはむみやこどりわが思ふ人はありやなしやと

《後撰集》 羈旅・一三五・たはれじまを見て・よみ人しらず、《伊勢物語》 第六一段

名にし負はばあだにぞ思ふたはれじま浪のぬれぎぬいくよきつらん

《後撰集》 恋三・七〇〇・女につかはしける・三条右大臣 名にし負はば相坂山のさねかづら人にしられでくるよしもがな

《古今和歌六帖》 あふぎ・三四四五 名にし負はばたのみぬべきをなぞもかくあふぎゆゆしと名付けそめけん

四、嵯峨朝文学の特徴

『文華秀麗集』の「燕」詩群の二首に見られる、趙飛燕という

歴史的人物を持ち出して、燕が、同じ「飛燕」や「燕」という名を持ちながら「趙飛燕」のような帝の寵愛を受ける存在にない自分を恥じたり嘆いたりする表現は、これまで見てきたような日本の和歌の表現方法にきわめて似通っている。いま問題にしている二首のふたつの詩句には、「還恥空為漢后名（還りて恥づ空しく漢后の名を為すことを）」、「還嗟…先負漢家妖艶名（還りて嗟く…先づ漢家妖艶の名を負ふことを）」というように、両者ともに「名」という文字が、その末尾に用いられていた。「趙飛燕」の「名」に掛詞的に「飛燕」ないしは「燕」という意味を読み取り、それにことさらにこだわりの、それにちなむことによって詩歌表現を作り出そうとする姿勢には、日本の和歌の詠作姿勢が大きく影響しているのではないかと考えられる。

ちなみに、もとより「趙飛燕」は人名であって地名ではないが、多くの漢籍に頻出する漢代の著名な人名は、作者たちにとって、地名と同じように遠慮なく扱うことができる「名」であったと思われる。また、この二首の場合、「名」にふさわしい実体を持つていないのは趙飛燕ではなく「飛燕」ないしは「燕」たち自身の方であって、「飛燕」や「燕」はそのことを恥じたり嘆いたりしている。その点においても、この二首の場合とさきに見た万葉集の表現の間にはいささかの異なりがあるが、いまは、

そのような差異も含めて、両者がともにことさらに「名」にこだわった詩歌表現を作り出しているところに注目しておきたい。

工藤重矩氏は『平安朝和歌漢詩文新考 継承と批判』（二〇〇〇年・風間書房）のⅢ第一章「平安朝漢詩文における縁語掛詞的表現」の中で、漢詩に見られる縁語掛詞的表現について、「平安初唐の勅撰三漢詩集には顕著な用例がみられない」と述べているが、本論で注目した『文華秀麗集』の「燕」詩群の二首は、その数少ない実例であったと言えるであろう。また同氏は前掲論文で、和歌と比べて漢詩に縁語掛詞的表現がはるかに「少なかった」理由として、表音文字と表意文字の違いのほか、遊戯的要素が強すぎたことを挙げている。「燕」を擬人化して、その「燕」の立場から、「趙飛燕」のようになれない自分を恥ずかしく思わせたり嘆かせたりする「燕」歌群の二首の表現は、そもそもきわめて遊戯的、戯笑的である。後藤昭雄氏は、「銅雀台」―勅撰三集の楽府と艶情（『アジア遊学・日本古代の「漢」と「和」・二〇一五年・勉誠出版）で、嵯峨朝文学において注目すべきことがらとして、天皇の命を受けて臣下が奉和詩を作るだけでなく、天皇の方が臣下の作に和して詩を詠んでいることとあげ、同種の例は他の時代にはまったく見られないと述べているが、『文華秀麗集』の「燕」詩群の第一首（Ⅲ）は、臣下であ

る巨勢識人の「春日四詠」に和した嵯峨天皇の作であった。またもう一方の第五首（115）は、嵯峨天皇の作に奉和した臣下・小野年永の作である。君臣の上下を問わず、互いに詩を唱和しあう親しい雰囲気の中だからこそ、「燕」の詩に趙飛燕を持ち出すという、きわめて遊戯的な表現、日本の和歌では一般的だった「名」にこだわり「名」にちなむ表現が、このように漢詩の中にも用いられ得たように思われる。

嵯峨朝の文学は、嵯峨天皇を中心にした親密な人間関係の中で、いわば「座の文学」として作られたものが多いと思われるが、その親しい交わりの中で、彼等の詩作は、必ずしも中国の文学そのままの引き写しではない、きわめて日本的な雰囲気を、時としてこのように交えてもいたように思われるのである。

付記 本稿は、平成二七年度の関西大学大学院における演習での発表（担当坂本美樹氏）とその場での討議をもとに、さらに発展させたものである。

（やまもと とくろう／本学教授）